

私とお茶と世界

大分県立大分上野丘高等学校二年（大分県）

高橋 香琳

「茶道は形のない芸術作品だ」

高校生になって本格的に茶道に関わるようになって、そう感じるものがよくある。足の運び方、茶杓を取る動作、帛紗に伸びる手。一つ一つの所作が一本の細い糸のように繋がって、茶道のあの、清い川のような雰囲気を作り出している。そこに無駄な動きなど一つとしてなく、積み上げられてきた歴史の重さを感じられる。

私が初めて茶道というものに触れたのは、小学生の時に行われた体験教室の時だった。普段見ることのない和装の女性が、これまで見たことのないことをしている。学校という日常を象徴する場所が、理解のできない非日常へと変化していくのが怖くて、私の心は少しの時間も落ち着いてなどいられなかった。暫くして、たてられたお茶が私の目の前に運ばれてきた。私は恐る恐るそれに手を伸ばし、そつと口に含んだ。想像していたよりも温かく、柔らかな味わ

いのそれが、私の心の緊張をほぐしてくれた。まるで魔法のようだ、とドキドキした。

今の私なら、それは魔法ではなく、先生の気遣いによって起こった出来事だと気づくことができる。ただ恐ろしく厳粛な空間だと思っていたお部屋も、床のお花やお軸のひとつひとつも、私たちを迎えるために揃えられた温かく親切な空間であるのだと感じることができる。

ではなぜ、あの頃はそれに気づけなかったのか。それは、私の人を気遣う気持ち成熟していなかったからだ。世界中の何もかもが誰かの思いやりや優しさでできている。誰かの気遣いに気づくことが上手くなったら、世界がもっと美しく、愛おしいものに感じられると思う。人を思い、誰かの思いに気づくことができる。そんな人間を目指そうと思えたのは、茶道に出会えたからだ。全てが合理的でありながら、人の心を忘れない。そんな営みだからこそ、私たちに深い感動と芸術性を感じさせるのだと思う。

何百年と続いてきた茶道の全てを理解するのは、若輩者の私には難しい。しかし、受け継がれてきた流れの一部として、次の世代にこの美しい芸術を伝えることは、できると思う。

「茶道から、世界へ」

先生は、よく「茶道で学んだすべてのことは日常に役立つのだ」ということを私たちに教えてくださる。これから

も茶道のお稽古に励み、少しでも多くの感動を茶道と通して経験することで、これからの世界をより美しく感じていきたいと思う。